然れども僕は僕が學說の無害なるべきを彼等に確信せしめむと欲す。吾が愛するラインホルド君よ君はかゝる人々に就ていかに考へ玉ふか、僕が愈明瞭となり愈無罪となる毎に彼等は益暗黑となり、僕が眞實の過失は益增すばかりに候、僕が無實なる無神論の爲に彼等の追擊を受けむとは思ひ設けざりき。彼等は僕を以て自己を明瞭にする自由思想家となし、(カントの韜晦は氏が幸福なりき)口ぎたなき共和論者となして、僕を追擊するにて候。彼等もおぼろに知れる如く僕の哲學が喚起せる獨立心に就ては、彼等之を恐るゝこと妖怪の如きにて候。

既に言へる如く以上の書翰は昨日の書翰にあらずして、實に千七百九十九年五月二十二日の日附を有す。然るに當時の政治的關係は獨逸に於ける最近の狀態と悲しむべくも酷似せり。唯當時にありては自由心多くは學者詩人及其他の文學者の間に榮え、今日にありては寧ろ活動的大衆の間に移りて、職工及實業家の間に燃ゆるの差あるのみ。革命の初期に當りて、獨逸の人民は一般昏睡の境に陷り、動物的太平は獨逸の全面に瞰歌せられしときに當りて吾が操觚社會は紛擾喧嘈を極めぬ。獨逸の閉放なる一小地に住せる最も孤獨なる學者と雖ども、此運動に與からざるはなく、當時の政治的進行の如何は彼等の間ふ所にあらずして、殆んど同情的にかゝる活動の社會的意義を感覺し、之をその著書に痛論せり。かゝる現象は吾等をして大なる海貝を想起せしむ。海貝は吾等が裝飾として暖爐の傍に用ゐるものなり。海を去ることしかく遠しと雖ども、一たび滿潮の時來りて、澎湃たる波濤の海岸に寄せ來るときは、忽然として鳴るなり。巴里に於て即ち大なる人の洋海に於て、革命の潮の漲れるとき、この地に於て大波濤の起れるとき、ライン河のかなたには、獨逸の人心嘆鳴沸騰せり。然れども彼等は孤獨の境にありき、彼等は唯無心無情の陶器、茶器、及珈琲の皿、若くは人の語を解するが如く機械的に首を動かす支那の偶像の間に立てり。獨逸に於ける吾等が先輩は、かの革命に同情を表せるが爲に甚だしく不幸を蒙れり。貴族及僧侶は最も卑陋なる奸計を彼等に加へぬ。彼等の數人は巴里に逃れ、而して不幸貧困を究めて遂に行く所を知らざるなり。余は近頃盲目なる獨國人を見たり。彼は革命の當時以來巴里に住せるなりき。余は彼を王宮に見たり。彼はこゝにて暖を取れるなりき。彼は顏色憔悴

形容枯槁僅に家々をたどりて歩めるさま見るに堪へず。人は語りて云く、これ
エチマルクの老詩人ハイベルヒなりと余は近來ゲオルグ、フオルスステルの死せる
樓屋を見たり。然れども獨逸に在りて自由思想を懷ける人は若しナポレオン及
佛國人の獨逸に勝つことなかりせば、その不幸は外國に逃れしものよりも更に大
なりしならむ。ナポレオンは自から己れの觀念學の救助者たりしを知らざりき。
彼なくむば獨逸の哲學はその觀念と共に慘刑に遭ひしなるべし。然れども獨逸
の自由思想家は餘りに共和的にしてナポレオンに仕ふることをなさず、餘りに大
膽にして外國の政府に屬することをなさいりき。而して以來深沈寂默を守れり
彼等は閉唇斷腸以て悄然として逍遙せり。ナポレオンの倒れしときは、彼等は微笑
せり。然れども彼等は愴然たりき而して沈默せり。彼等は當時一般に盛なりし
政治的熱情に對しては殆んど知らざるものゝ如くせり。彼等は己れの知れるも
のを知りて沈默せり。かゝる共和黨の人々は、甚だ閑靜質素なる生活をなし一般
に年老いぬ。七月革命の破裂せりし時に當りて、彼等の多くは尚ほ生存せり。而
して從來全く身を屈して怯怯にも沈默を守りつゝ逍遙せる老鴈桑の今や忽ち頭

を擧げて吾等少年を見て親しげに相笑ひ握手をなして、をかしき物語りをなせる
を見て吾等は少からず驚歎せり。余は彼等の一人の歌を謠ふを聞けり。珈琲店
にては彼等は我等に「マルセエユ」の歌を謠ひぬ。而して吾等はその調と美しき語
とを習へり、しかれども之は長く續かざりき。吾等は老人よりも巧に謠ふやうに
なりぬ。何となれば彼は最もおもしろき句を謠ふにあたりて屢愚人の如く大笑
し、或は兒童の如く泣けり。かくの如き老人の生存して少年に歌を教ゆるは甚だ
可なり。吾等少年は永くその歌を忘るゝことなく中には未だ生れ來らざる子孫
に向て、この歌誦んずる人もあらむ。然れども吾等の多くはかゝる時の來らざる
に先だちて、故郷の牢獄若くは外國の樓室に死するならむ。
余をして再び哲學を論ぜしめよ。余は上來フィヒテ哲學が最も微弱なる抽象に
よりて成り、その結果は鐵の如き堅牢性を現じて、遂に最も大膽なる頂點に達せる
所以を說けり。然るに一夜のうちに大なる變化は起れり。朝夙に之を見るに、か
ゝる哲學は花を飾り、おやしげに微笑して温和謙遜なるものとなれり。思想の階
段によりて天に昇り、巨大なる手を振るひ、天の空虛なる室を探れる理想的惡魔は、

一轉して愛情の爲に煩悶する謠遜の基督的のものとなれり。此の如きはフィヒテの第二期なり。この期のフィヒテは吾等に大なる關係なし。今や氏が全體の法式は最も奇異なる變化を受く。此の時期に當りて氏は「人間の職分」といへる一書を著はせり。これ諸君が既に佛語に醒譯せるところなり。これと相類似せる書「幸福なる生活の指針」も亦此の時期に屬す。

傲慢なるフィヒテが嘗てかゝる思想の大變化を懺悔したることなきは、極めて自然の數なりとす。氏は主張すらく、余が哲學は依然として同一なり。唯その語法を異にして、之を改善せるのみ。世人は嘗て余が所言を解せずと。氏は又主張すらく、現今獨逸に起りて唯心論を排擊せる自然哲學は、その根本とするところ全く余が本來の法式と異ることなし。而して余より分離してかの新哲學を開始せるヨゼフ、シエリングは唯余の語法を變せるのみにして、余が學說を不快なる追加によりて擴張せるのみと。

吾等は此に於て獨逸哲學の新方面に到達す。余はヨゼフ、シエリングと自然哲學との二名を擧げぬ。而してシエリングの名は人全く之を知らず。自然哲學の名は世人未だ廣く之を解せざるが故に、余は茲に二者の意義を明かにすべし。余はこの一小冊子に於て之を詳論することを得ず。かゝる問題に關しては他日を俟て之を論ずる時あるべし。茲には唯二三緊切なる迷謬を痛論し、且つ自然哲學の社會的緊要に就て幾分の注意を請はむと欲す。

第一に論ずべきはフィヒテがヨゼフ、シエリング氏の學說を以て、全く己れの學說となし、唯己れの學說の體形を變して之を擴張せるのみといへるは、決して失當の言にあらざることとこれなり。シエリング氏の唱へしところは、フィヒテの敎えしところなり。フィヒテは唯一の本體我絕對を說けり。理想と現實との同一を說けり。その知識論に於ては、智力の構成によりて、理想より現實を構成せむとせり。ヨゼフ、シエリング氏は之を顚倒せり。氏は現實より理想を顯はさむとせり。猶ほ明瞭に之をいはむに、フィヒテは思想と自然とは同一なりとの原理に基きて、精神作用に因りて現象世界に到達し、思想に因りて宇宙理想より現實を作れり。之に反してシエリングにありては、同一の原理を基礎としながら、現實世界が純然たる觀念となり、自然が思想となり、現實が理想となる。故にフィヒテ及シエリング

の二面の方針は、互に相補遺す。故奈何といふに、上述の原理に基きて哲學は二部分に相別たるべし。而してその一部にありては、いかにして自然は觀念によりて現象となるかを證し、他の一部にありては、いかにして自然は唯觀念中に溶融するかを證す。故に哲學は超絶的唯心論と自然哲學とに別たるべし。シェリング氏はこの二個の方針を悟了せり。而して後者を究むるには「自然哲學に於ける觀念」を以てし、前者を論ずるには超絶的唯心論の系統を以てせり。

余が茲に千七百九十七年及千八百年に世に公にせられし右の二書を擧げたるは、かの二樣の方嚮のこの二書中に論せられたるが爲にして、決してシェリング氏の一貫せる完全なる系統のその中にこれあるが爲にあらず。否なかゝる一書の系統はシェリング氏のいかなる書にも之を見るを得べからず。氏にありてはカント及フィヒテに於るが如く、その思想の中心と見るべき書なし。故に人若し書籍の内容とその文字の雄健とに據りてシェリング氏を批評せば、これ甚だ失當なり。吾等は寧ろ史的に年月を追ふて氏の書籍を讀み、その思想の漸進的發展を驗し、以て氏の根本觀念に著するを以て至當とす。余は又屢人の言ふ如く、シェリング氏にありては、何時に思想已みて、何時に詩歌の始まるかを峻別するの要ありと信ず。氏は喊に造化によりて、詩才よりも好詩性を賦與せられたる人々の一人にして、パナス(詩神の住せる山)の少女と相交はることを得ずして、自から哲學の深林に入り抽象的のハアドリアデン(山神)と不姪性の結婚をなせるものと謂ふべし。此等の人々の感情は、詩的なり。然れどもその感情運用の具たる言語は弱し。彼等は思想と知識とを他人に傳ふべき藝術の形體を得むと欲して能はざる人なり。詩はシェリング氏の力にして、又弱點なり。詩はシェリング氏がフィヒテと相別るゝ所以にして、氏の得失長短またこゝにあり。フィヒテは純然たる哲學者なり。而してその威力は辨證法に存し、その長所は辨明に存す。然れども此等はシェリング氏の短所なり。氏は寧ろ直觀の中に住し、論理の冷かなる頂點に在りては、自から故郷に在るか如き感を起すことを得ずして、自から好んで象徴の花の野に入る。而して氏の哲學的長所は構成にあり。然れども構成の能力は、中流の詩人若くは第一流の哲學者に於て屢〻見ることを得べき精神の技能なり。

シェリング氏は哲學の超絶的唯心論の一部にありては、フィヒテの崇拜者にして、

又崇拜者たらざるを得ざるもその自然哲學にありては、氏は花と星との下に住す。而してその花は咲きその星は輝かさる可からざる所以は、上來論ずる所によりて明瞭なりと信ず。故にかゝる自然哲學の方嚮は、特り氏によりて追求せらるゝのみならず、また氏と同興同感の友人より追求せらる。而して此の際現じ來れる騷亂は、唯に以前の抽象的精神哲學に對する詩人的反動に過ぎず。終日狹隘なる一室に於て、單語と數字との中に呻吟せる兒童の放たれたるが如く、シエリングの學生は自然の中に彷徨し、芳香温暖の實在中に出でゝ、或は歡呼し、或は筋斗酬をなし或は大闊驅をなせり。

「シエリング氏の學生」といへる名目は、その平常の意義を以て解釋せらるゝを要す。シエリング氏自らいふ所によるも、氏は唯古き詩人の風を帶びてのみ、一學派を作らむと欲せるなり。氏は一の詩人學校を起こせるものにして、この校に遊べるものは一定の訓練及一定の學課によりて束縛せらるゝことなく、何人も唯その精神に遵ひ、而して何人も自己の思ふがまゝにその精神を表現することを得。氏は又かくいひ能ふことを得べかりしならむ。云く、余は一の豫言者學校を起せるもの

にしてこの學校にありては、感激せるものゝ、各々己れの思ふがまゝに、その好める語法によりて、豫言することを得るものなりと。而して氏の精神によりて鼓舞せられたる弟子等は、實際にかゝる事を爲せり。最も偏狹なる人々は、各々その豫言を言ひ、各人その言語を異にせり。是に於てか哲學に於ける大なる五旬祭日（ペンテコステ）は起れり。最も緊要莊嚴なるものゝ全く假面舞踏若くは馬鹿ばやしに轉用せらるべきこと、卑怯なる愚人及厭世的の滑稽兒の一群がまた大なる觀念を左右すべきものなることは、吾等シエリングの哲學に於て之を見る。然れどもシエリング氏の豫言學校若くは詩人學校の爲に自然哲學が蒙れる嘲笑をば決して自然哲學自己の罪に歸すべからず。何となれば自然哲學の觀念は、その基く所スピノザの觀念即ち汎神教に外ならざればなり。スピノザの學説とシエリング氏がその最善の時期に於て提出せる自然哲學とは、本來同一不二なり。獨逸人はロックの唯物論を賤しみ、轟てライプニッツの唯心論をその頂點まで驅逐して、その不十分を發見したる後、遂にデカアトの第三見即ちスピノザに到達せり。茲に於て哲學は再び大循環をなせり。而してそは二千年の昔希臘に起れる哲學思想の循環と同一な

るものなりといふことを得べし。然れ共此二循環を仔細に比較するときは、根本的相違の其間に存せるを見る。希臘人はまた吾等の如く大膽なる懐疑家を有しき。「エレア」學派はまた獨逸の新超絶的唯心論者の如く、外界の實在を否定せり。然れども唯一事吾等の希臘人若しくはデカアト學派に先んずるところあり。即ち我等はその哲學的循環を始むるに人間認識の根源の撿覈を以てせり。即ちカントの純正理性の批判を以てせり。

茲にカントの名を記せるに因みて、猶數語の附加すべきことあり。カントが神を存在せしめむ爲に用ゐたる神の存在に關する證明、即ち所謂道德的證明は、シェリング氏最も激烈に之を駁議せり。而れどもカントの用ゐたるかの證明は決して有力なるものにあらずして、カント恐くは己れの善心より之を成立せしめたるものなるべきよしは前述の如し。シェリング氏の神は即ちスピノザの神宇宙なり。氏は少くとも千八百一年に於て思索的物理學雜誌の第二卷に於ては、かゝる思想を有したりき。神は自然と思惟との絶對的同一なり。物質と精神との絶對的同一なり。而して絶對的同一は宇宙の原因にあらずして、宇宙自身なり。即ち神宇宙なり。かくて神宇宙にありては相對と部分あることなし、絶對的同一はまた絶對的總體なり。一年後に至りてシェリング氏はその神を更に進歩せしむ。之を論ぜる書を「ブルノオ一名事物の神的或は自然の原理」といふ。此の書の題號は吾等をして悲しく吾等が教義の最も高尚なる殉難者なるノラのギオルダノ、ブルノオを想起せしむ。伊太利人は思へらく、シェリング氏はブルノオ氏の最善の思想を假用せりと。以てシェリングを以て剽竊家となせり。然れどもこは失當なり何となれば、哲學には剽竊なるものあるべきいはれなければなり。千八百四年に及びてシェリング氏の神は「哲學及宗教」といへる書に於て、遂に首尾完足の體を得て現せり。吾等は此に於て絶對の學説の圓滿具足せるを見る。即ち絶對は三樣の法式によりて表明せらる。その一は、合式的なり。云く、絶對は理想にもあらず現實にもあらず、(精神にもあらず、物質にもあらず。)全く二者の同一なりと。第二は假説的なり。云く、主體と客體と存在せば、絶對は二者の本體的同一なりと。第三は離接的なり。云く、絶對は唯一の實在なり、而かしてかゝる唯一體は、或は同時に或は交互に、全く理想的として或は全く現實的として觀ぜらるゝことを得と。

第一の法式は全く消性なり、第二は之を解するには一の要約を假定す、而して此の要約を解するは被要約的絶對を解するよりも更らに困難なり。第三の法式は全くスピノザの法式なり。スピノザは云く、絶對的實體は思惟としても又延長としても認識せらると。かるが故に、哲學上の道程に於ては、シェリング氏はスピノザより一歩を進むること能はず。何となれば絶對はスピノザの所謂二個の屬性、思惟と延長との法式の下に於てのみ、之を解するを得べければなり。然るにシェリング氏は今やその哲學的道程を去りて、神秘的直觀の法によりて絶對の觀照に到達せむことを求む。氏は絶對の中心點にその本體を觀照せむとす。而して本體とは即ち絶對の理想にもあらず、現實にもあらず。思想にもあらず、延長にもあらず主觀にもあらず、客觀にもあらず、精神にもあらず、物質にもあらずして、而して……

……嗚呼以下余の知る所にあらざるなり。

茲に於てシェリング氏の哲學はその終りを告げて、氏の詩、或は余をして言はしめば、痴體こゝに始まる。然れどもシェリング氏は詩を以て老衰者一群の最大なる喝采を得。蓋し老衰者等は平穏なる思惟を去りて、かの回々教僧侶の武斷を摸倣するを以て、寧ろ適當とせる人々なり。回々教の武斷に在りては、余が友ダヴィッ(1810—1876)の談ずる所によれば、その僧侶等は圓陣を作りて廻轉し、その結果として、客觀主觀の世界の何れも彼等の腦中より消失し、客觀主觀の融合して現實にもあらず理想にもあらざる白色なる虚無となり、彼等は見ゆべからざる者を觀、聞くべからざる者を聞き、色彩を聞きて音を觀、即ち絶對の彼等に觀照せらるゝに至りて、已むなりとぞ。

余は信ず、絶對を智力的に觀照せんとせる試驗によりて、シェリング氏の哲學的生涯は茲にその終りを告ぐと。今やシェリング氏よりも一層大なる哲學者現出して、自然哲學を完全なる系統に編成し、その總合によりて現象の全世界を説明し、彼の先輩の大觀念を更に大なる觀念によりて補遺し、その觀念を一切の修行によりて貫徹し。以て科學的に之を建立せり。彼はシェリング氏の弟子なり。しかも哲學の國に於ては、その師傅の全力を凌駕し、その師の頭上に攀んでゝ、終には師を圧して暗黑界に入らしめたる弟子なり。こはこれ大なるヘゲルにして、ライプニッツ以來獨逸國に生れたる哲學者中最高なるものなり。ヘゲルがカント及フ

イヒテに優れるは明瞭なる事實とす。氏はカントの如く銳峻にしてフイヒテの如く活潑なり。而してカント及フイヒテには見るを得べからざる組織的なる心の平和、即ち思想の調和を有す。カント及フイヒテには寧ろ革命的精神の秀でたるを見る。ヘエゲルを以てヨセフ、シエリング氏に比するは、不可能の事に屬す。何となれば、ヘエゲルは人格の人なればなり。而してヘエゲルはシエリング氏と同じく、國家及敎會に對して餘りに危險なる辨疏を以てしたりといへども、その國家に與ふるは獨り理論上少くとも進步主義を奉ずる國家に於てし、その敎會を辨疏するは、獨り自由探究の主義を以てその生命となせる敎會に於てせり。而して氏はその所論に於て一も隱蔽するところなし。氏は氏の一切の目的を自白せり。シエリング氏は全く之に反す。氏は實際上幷に理論的絕對論の一室中に蜿蜒として、精神の桎梏の鑄造せらるゝ、エスイット敎の洞窟中に於て云爲す。而して氏は尙ほ自から依然として昔と異らざる同一の光明の人なりと揚言せむと欲す。氏は自己の違背を違背し、その沒落の恥辱に加ふるに更に僞言の怯懦を以てす。吾等は祇度を以てするも又智慮を以てするも決して隱蔽することを得ざる一事あり。吾等は之を沈默するを欲せざるなり。嘗て獨逸國にありて最も大膽に汎神敎の宗敎を疾呼し、自然の神聖化と人間の再び神の權力に回歸することゝを最も大聲に痛論せる人は、自己の學說を破棄せり。彼は自から奉仕せる聖壇を去れり。彼は過去の信仰厩に倒匐せり彼は今や純然たる加特力敎徒となり、而して世界を創造するといふが如き痴愚を演じたる世界外の個人的一神を說く。嘗信仰の人々はその鐘を鳴らして、かくの如き改宗について、「神よ救ひたまへ」を歌ふもまた可ならむ。然れども此の如きは舊敎徒の人々の敎義を確證せるにあらずして却て人間の疲弊老衰するに至れば、人間のその體力的及精神的活氣を失ふに至れば、而して人間のもはや樂むことも考ふることもなし能はざるに至れば、人はやうやう加特力敎を好むにいたるべきを證明せるものなり。死の床にありてはかくのごとくして多くの自由思想家の遽かに改宗せることあり き。然れどもこは舊敎徒等のために誇るに足るものならず。かゝる改宗の談は多くは病理學に屬し却て舊敎徒等の爲に反證を擧ぐべきものなり。畢竟する所かゝる談は自由思想家が健全なる感覺を有して神の自由なる天地を逍遙し、且つ自己の理性を充分に

運用し得る間は、之を改宗せしむることの到底無能の事たるを證するものに過ぎず。

ベランシュ(1776-1847)嘗ていへることあり。原始動物はその原始の行を成就せば直ちに死すべきものなるは一の天則なりと。ベランシュの言誠に然るべけれども、これ一を知て二を知らざるの言なり。余はまさに原始の事業成就せらるれば、原始動物は死亡するか或は違反すといはむとす。かくの如くして吾等は獨逸の思想家がシェリング氏に下せる酷評を稍和くることを得べし。かくの如くして、吾等はシェリング氏の上に落ち來れる過大なる輕侮を轉じて、沈靜なる同情となすことを得べし。而して其思想の發表若くは實施に就て自己の一切の能力を費じたる人はその後惑廢困頓として或は死の腕に倒るゝか、若くは己れが以前の敵人の腕に倚るか、二者その一に居るべきは、全く天則なれば、シェリング氏が自己の教義より違反せるは、則ちかゝる天則の結果として之を說くを得べし。かゝる說明によりて吾等は最も悲しむべき現今の著名なる現象を解することを得べし。吾等はかゝる說明によりて、何が故に自己の意見の爲に一切のものを犧

牲に供し之が爲に戰ひ之が爲に焦心せる人々が、一旦勝利の後は、かゝる意見を棄てゝ再び敵の陣營に下るかを解せむ。かゝる說明によりて余は又ヨセフ、シェリング氏のみならず、フィヒテ及カントも亦かゝる改說の罪あることを注意しおかざる可らず。フィヒテは幸にも自己の哲學より違反せることの、餘りに顯著なるに先ちて死亡せり。カントは實踐理性の批判に忠ならざりき開祖は、死すか、或は違反す。

余は何が故にかくの如きことあるかを知らず。唯前節の末文は余が心情をして著るしく悲愴ならしめ、以て茲にシェリング氏に關する其他の事實を載すの勇なからしむ。故に余をして寧ろかの以前のシェリング氏を讚歎せしめよ。氏が當時の紀念は、長く獨逸思想の記錄に花を咲かすべし。何となれば當時のシェリングはカント及フィヒテに同じく、獨逸哲學革命の大方面の一面を代表すればなり。而して余は本誌に於て、之を佛國の政治的革命の方面と相比較せり。誠にカントを以て虐政的同盟に比し、フィヒテを以てナポレオン帝國に比すれば、シェリングはナポレオンの帝國に尋で起れる復古的反動に比すべし。然れどもこは復古の

意義に於て之を言ふなり。シェリング氏は先づ自然の正當なる權能を回復し、精神と自然との調和を求め、而して二者を永久の世界心に統合せむとせり。氏は吾等がソクラテスによりて、始めて人間の心情に入り、その後觀念界に流入して、以て古代の希臘哲學者間に見るを得べき自然哲學を復起せり。氏は又遂に他の事物を回復せり。氏はこの事物により悪しき意義を以て佛國の復古に比せらるゝことを得るに至りぬ。然れども世間一般の理性は、之を忍ぶこと能はず。氏は遂に思想の王位を剝奪せられぬ。氏が政權代理者なるヘエゲルは氏が王冠を奪ひ、氏を戴冕せり而して一態を映せるシェリングは爾來ミュンヘンに於ける一貧僧として生活せり。ミュンヘンはその名既に僧侶的特質を有す。余は氏が此の一小都に於て、その大なる青白き兩眼と悄然たる容貌とを以て、幽靈然として彷徨せるを見たりしが、昔時榮華の沒せるおもかげ、殆んど仰ぎ見るに堪へず。ヘエゲルはベルリンに於て王位に昇り、いさゝか神油を塗りて、爾來獨逸哲學を統轄す。吾が哲學的革命は茲にその終りを告げヘエゲルは革命の大なる圈を閉ぢぬ。爾來只自然哲學的學說の發達と完成とを見るのみ余が既にいへりし如く、自然哲學は一切の科學に進入し以て最も非凡なる最も偉大なる事業を惹起せり。固より此際幾多の喜ぶべからざる現象の起れるは余が既記の如し。かくの如き顯象は實に多面にして一々に之を數へ立てむとせば、一卷の書をなすべし。而して吾等の哲學史の本來興味あり且つ絢爛の趣を帶べる部分は、全く茲に在り。然れども余は佛國人がかゝる興味ある部分に就て、全く無知なることの却て己れに必要なるべきを信ず。何となれば、かゝる種類の論述は佛國の人々の頭腦を益混亂せしむるの功あるのみなればなり。自然哲學に關する多くの文章は、若し一々に相互の關係を脫して、見らるゝときは徒らに佛國人士の不幸を來たすのみ。余の知る限りにては、若し佛國人が四年前獨逸の自然哲學を知りたらむには、七月革命は決して起こらざりしならむ。七月革命の事業には思想と活力との集中、高尚なる偏狹、確固なる德義及び一種の哲學派が作れる十分なる輕躁とを要しき。合法と加特力教の肉の教とを代表することを得たる哲學の逆行は、徒らに佛國人の感激心を鈍ならしめ、その勇氣を沮喪せしめしならむ。故に當時佛國人に獨逸の哲學を講ぜむと欲せし大無系統哲學者が獨逸哲學に關して更に知る所なかりしは、世界

史上極めて有力なりとす。彼が天賦の無知は佛國幷に全世界の幸福なりき。

自然哲學は知識の種々なる方面に於て殊に自然科學に於て最も美しき果實を結べるの側ら、他の方面に於ては最も厭ふべき雜草を生じたり。獨逸の最も才氣ある思想家にして、且つ最も大なる市民の一人なるオヽケンがその新觀念世界を發見し獨逸の少年を人類固有の權力即ち自由と平等とに向て激勵せると同時に、アダム、ミュルレルは國民が自然哲學主義を培養すべきを說き、ゲエレス氏は中世紀の神秘教を論じ、國家は木の如し、而してその有機的關節に於ては中世紀の團隊教會政治に於て見るが如き幹と枝と葉とを有せざるべからずとやうの自然科學的見解を以てせり。ステッフェンス氏は哲學的法則を立し、以て農夫と貴族とを別ち、農夫を以て先天的に樂むことなくして勞働すべきものとなし貴族を以て勞働するとなくして愉樂するの權あるものとなせり。人の語るを聞くに數月前一名ハッグストハウゼンと呼べる一愚人、ウエストフアリヤの一小貴族は、一冊の書を公にし、普魯西亞政府に請願して、哲學の全世界有機體について論ずるが如き必然の類似に鑑みて以て政治的階級を二層嚴密に區別せむことをいへり。その言

に云く、宇宙に火氣水土の四原素あるが如く社會にも亦これに似たる四個の原子即ち貴族僧侶市民及農夫あるべしと。

若し茲に人ありて、かくの如き大愚論の哲學より生じて、徒らに有害なる繁茂をなすを見、又獨逸の青年等が形而上の抽象に耽りて、目下の時代問題を忘却し、ために哲學が實際生活に關しては殆んど無用の長物たるに過ぎざるを見は、愛國者及自由思想の人々はかゝる哲學に對して憤懣の情あるは宜なることゝ言ふべし。而してかゝる哲學を以て全く無用の空論となして之を打擊するものさへあるなり。吾等はかくの如き哲學嫌ひの人々に對して、眞面目に辨駁の勞を執るが如き愚なるものにあらず。獨逸哲學は有用なる哲學にして、全人類に關係を有する事件なり。而して幾多後代の子孫に至りて、始めて吾等が先づ哲學を作り、而して後革命を起すことの可否得失を斷言することを得べし。余の考ふる所によれば、吾等の如き法式的國民は、先づ宗教改革に始まり、やがて哲學に移り、哲學の完成を俟て、政治的革命に移つることを得るものなり。かゝる順序は極めて至當なりと信ず。哲學の冥想を凝らせる人々は、後來革命の爲に便宜なる目的に用ゐらるゝことを

得べし。然れども若し政治革命の哲學に先ちて起ることあれば、革命の爲に盡瘁せる人々は、決して哲學の用ゐる所とならざるなり。獨逸の共和政治黨の人々よ、決して憂ふる勿れ。獨逸の革命はカントの批判、フィヒテの絶對的唯心論及自然哲學に先たゝれたるの故を以て、決して温和となることなし。否なかゝる學說によりて革命的活力は愈〻發達し、唯〻その活力の破裂して、震天動地の時あらむを待つのみ。此時に當てや、カント派の人々は現れ出で、現象世界中に祇慶の念を入るゝを許さず、以て無遠慮にも過去の根を絶滅せむが爲に、劍と斧とを揮て、吾等が歐羅巴の生活の地盤を動かすべし。武裝せるフィヒテ派の人々も、亦舞臺に上りその意志の狂亂心を振りかざして、恐怖と利己心との束縛を脱却すべし。何となれば彼等は精神の中に住す。彼等は物質に抵抗すること、恰かも身躰の苦痛と快樂とによりて動かされざりし、初期の基督教信者の如くあるべければなり。然りかくの如き超絶的唯心論は、社會紛擾の際に當りては、初代の基督人よりも泰然不動ならむ。何となれば初期の基督信者等は、天福を得むが爲に蘆世の苦患を忍べるに、超絶的唯心論者は即ち然らず。彼等は苦痛その者を以て既に虛無なる假象と觀し、而して彼等が自己の思想の城壁は所詮到達すべからざるものなればなり。然れども此等よりも更に猛勇なるべきは、實に自然哲學ならむ。彼等は自から獨逸革命の人となりて、しかも自己と破壞事業とを同一視すべければなり。カント派の手腕は、雄健强固ならむ。何となれば、その心は傳說的思想を有せざればなり。フィヒテ派の人々は猛然として如何なる危險にも抵抗すべし、何となれば危險は現實に於て彼の爲に存在せざればなり。更に恐るべきものは自然哲學ならむ。故奈何にといふに、彼は自然の根本的威力と相結合し、古代日耳曼的汎神教の鬼妖的能力を逞うし、且つ古代獨逸人に見るを得べき戰爭好きの念は、常にその身に覺醒して、破壞するが爲に戰ふにあらず、勝たむが爲に戰ふにあらず、唯戰はむか爲に戰ふものなれはなり。基督教はかゝる日耳曼の動物的好戰性を和らげたり。是れ實に斯教の美しき功勞なり。然れども、決して之を破壞撲滅すること能はざりき。而して馴致せるタリスマン(石像)の一たび破壞するとあらば、古代武士の猛威は再び忽然として現出するべし。その狂亂に近き武人の暴威は、北歐の詩人が屢〻唱吟するところなり。かのタリスマンは脆弱なり、故に遠からずその亡滅すると

きの來るならむ。此時に當てや、古代の石の諸神は朽ちたる弊屋の中より起ちて、眼上に積れる數千年の塵埃を拂ひ、而して大巨槌を有せる怒人は、突然起立して、古代獨逸の大伽藍を破壞すべし。嗚呼佛國人士よ、諸君若しかゝる破壞の騷音を聞くとあらば、心を用ゐて獨逸に起れる事業に與かるなかれ。そは諸君の不利ならむ。火を燃やすなかれ、鎮めむと力むるなかれ、燃え移る火は忽ち汝の指を燒かむ。余が忠言を笑ふなかれ、諸君をしてカント、フィヒテの哲學及自然哲學に就て諸君を戒むる一夢想家の忠言を笑ふなかれ。精神界には既に起れりし大革命の必ず や早晩現象世界に起るべきを思ふ。空想家の忠言を笑ふなかれ、思想の事業に先んずるは、猶ほ電光の雷鳴に先んずるが如し。獨逸の雷鳴は飽く迄獨逸風なり。そは甚だ峻速ならずして、稍〻徐々に瀧々の音を發す。然れども早晩來らざる可らず。而して諸君若し世界史に於て嘗て聞きたることなき轟音の響きわたることあれば、これ即ち獨逸の雷鳴のその目的を達せるなりと想ふべし。かゝる瀧音と共に鷲は死して空中より落ち來り、遠き亞弗利加の森林に住へる獅子はその尾を挾みてその王窟に入らむ。茲に於て一演劇は獨逸國中に演ぜらるべく、佛國革命は之に比すれば、殆んど無邪氣なる一話に過ぎざるが如き觀あるべし。現今は誠に靜隱なり、而して一二人の稍〻活潑に動作せるもののみ。然れどもこれを以て實際の芝居と誤想するなかれ。これ唯に空地に於て奔走し或は吠え或は嚙む二三の小犬に過ぎざるのみ。やがて時來れば、劍客の一群は現れ出でゝ死生を爭ふ活劇を演ずるなり。

しかも、かゝる時は來るべし。而して芝居の階段に於けるが如く、諸國民は大仕合を見むが爲に獨逸國の周圍に群集すべし。嗚呼佛國人よ。諸君、願くは靜隱なれ、而して決して喝采の聲を擧ぐべからず。我等獨逸人は之を誤認して粗暴にも汝等を平隱なる場所に放逐すべし。何となれば、吾等が從前殆んど奴隷的に壓抑せられたる境遇にありながら、猶能く屈、諸君にうち勝つを得たりとせば、血氣盛なる自由の聲の傲慢なる境遇にありては猶一層の勝運を得べければなり。かゝる境遇にありては人は何をか爲すかは諸君の既に知る所なり。而かも諸君は今や既にかゝる境遇にあらず。諸君よ注意せよ、余は實に諸君の爲に之をいふなり。にが〳〵しき眞理を諸君に語るは、豈に他あらむや。諸君はクロプ、テンとコサッ

ク兵との同盟を恐るゝよりも、猶ほ自由となれる獨逸國を恐れざるべからず。何となれば獨逸の人々は諸君を好まざるなり、是れ實に解すべからす。諸君はしかく愛すべき人なり、諸君の獨逸に在るや孜々として少くとも獨逸人民の善良なる一半の意に背かざらむことを力めたり。かの一半は誠に諸君を愛す。然れども一武器をも有せざる他の一半の、諸君の喜ぶ所とならざるを如何せむ。余は獨逸人の何が故に諸君に敵意を挾めるかは、遂に余の解するところにあらず。ゲッチンゲンのビール店に於て、嘗て若年の保守的獨逸人云へらく。吾等は伊太利のチアハペルに於て佛國人が殺したるコンラヂン、フォン、スタウフエン帝の爲に佛國人に仇を報せざる可らずと。諸君は既に之を忘れたるならむ。然れども吾等は何事をも忘れざるなり。見よ、諸君、吾等にして若し諸君と同盟するの念だにあらば、吾等は之に對する確固たる理由なきを愛へざるなり。しかも未だ嘗てこれなきは何ぞや。余はかるが故に諸君の保護警戒することあらむを望む。獨逸國に於て何事の起るあらむも、普魯西亞の皇太子若くばドクトル、ウイルト(Wirth 1798—1848 獨逸の自由なる愛國者なり)の位に即くも、諸君は常に武裝して泰然として諸君の哨兵線に立ち、銃劍を手にせよ。余は實に諸君の爲に之を言ふなり。諸君の大臣が佛國の兵を解散するよしを聞きて、余は實に愕然たりき。

諸君は現今中世派の思想を懷けるにもかゝはらず、本來尚古派の人々なるが故に、かのオリユンプを知らるゝならむ。故に諸君はチクタフル及アンブロア(希臘諸神の欲物)に嬉々として遊べる裸躰の男神女神の中にありて、其身は歡呼逸樂に圍繞せられながら、常に甲冑を着して頭には兜を戴き、手には槍を持てる、一女神の立てるを見む。

こは智の神にあらずや。

41
102

ハイ子氏 獨逸宗教哲學史 終

名文教

41
102

文學教育科

石著綱要

ハイネ氏獨逸宗教哲學史

登張信一郎譯

013724-000-8

41-102

M34

ABA-0201

独逸宗教哲学史（ハイネ氏）

登張　竹風（信一郎）／訳